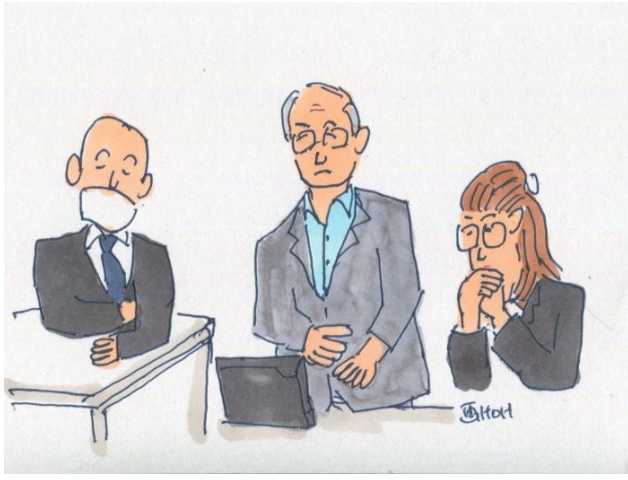
町田古墳群、学校給食等で一般質問

私は24日、一般質問に立ち、市内の山城（城跡）の実態と課題、吉川区内の町田古墳群のその後の調査と課題、学校給食と地域農業について早川教育長に質問しました。以下はその大要です。

【橋爪】市内にある山城の価値をどう認識しているか。また現状と課題は。
【早川教育長】確認できている山城だけでも77か所ある。地域への誇りや愛着にもつながる「地域の象徴」としての価値を有するほか、文化財としての「学術的価値」を有するものもある。土塁やの一部崩落などがあり、草刈りなど継続的な維持管理が課題だ。
【橋爪】吉川区町田の前方後円墳の発見は「当市の歴史に新しい１ページを加える成果」だった。古墳群のその後の実態把握と保護の動き、及び地元から出ている案内看板、アクセス道路整備の要望への対応について聞きたい。
【教育長】町田古墳群は、令和2年3月に頸北歴史研究会が山城の分布調査の際に、新たに発見した古墳群だ。さらに現地調査を行い、令和4年2月に文化財保護法に基づく遺跡登録の手続を行い、保護措置を講じた。令和5年4月には、新潟県の埋蔵文化財専門員、頸北歴史研究会、地元町内会、市教育委員会などが合同で、遺跡登録により周知化した古墳以外の古墳の存在を確認するために現地調査を行ったが、新たな発見に至っていない。
現在登録されている古墳群周辺には未発見の古墳が存在する可能性があることから、今後も頸北歴史研究会を始め関係機関と連携し、最新の技術である赤色立体地図を活用した調査なども用いながら、町田古墳群の全容把握に努めていく。アクセス道路は、古墳群を含め周辺一帯が民有地であることなどから、整備は難しい。案内看板も、町田古墳群の全容が明らかになっていないことなどから現時点での設置は困難だ。（同じ時期に発見された新潟市の角田浜古墳では案内看板も道路もできている…橋爪）



【橋爪】農家数が激減し、このままでは担い手がいなくなる。農林水産部での取組とともに学校給食で子どもたちに農業への関心を持ってもらうための一層の努力が必要だ。私は、農業は人間の命を守るもっとも重要な職業の一つであることを根本に据えつつ、① 地場産の農産物の利用にあたっては、できるだけ生産者の顔が見えるようにすること。②たくさんの生き物とのつながりの中で農業生産が行われていることを知ってもらう。③地元でできるだけ多くの農産物を生産し、自給率を高めることの大切さを学ぶ。④生産したものの消費に至る動きを知ることの４つの視点での取り組みが必要と思っている。教育長の考えを聞きたい。
【教育長】言われた４つの視点は学校給食の７つの目標にも含まれていることだ。学校の授業、給食の時間だけでなく、農業体験、生産者との交流を通じて顔の見える関係づくり、血の通った交流が大事だ。農業の担い手が育つことにつながればいいなと思っている。教育委員会としても応援していきたい。

【ニラ】（再掲）ねぎ属に属する多年草。漢字で「韮」と書きます。ニラは中国原産ですが、いまや日本各地で栽培されている野菜の１つです。わが家が尾神岳のふもとにあったころ、屋敷の土手にもありました。花期は8月から9月、茎の先端に小さな白い花を20～40個も咲かせます。花言葉は「多幸」「星への願い」など。写真は24日、吉川区代石にて撮影しました。

稲刈りが最終盤になってきています。こうしたなか、田んぼでコウノトリの親鳥ペアを見かけることが多くなっています。バッタや虫などのエサがたくさんあるのでしょうね。写真は20日、吉川区内で撮ったものです。

「なくそう原発2025柏崎大集会」が21日、柏崎市文化会館で行われました。参加者は1000人を超え、柏崎刈羽原発の再稼働は許さない、という熱気がすごかった。イラストは報告する水内基成弁護士。

はしづめ法一の活動レポート

No.2221 2025.9.28
発行・編集 日本共産党上越市議　橋爪のりかず
Tel 025-548-3627
通じないときは 090-5392-1961
E-mail hasiznyg_0808@yahoo.co.jp
URL https://www.hose1.jp/

ブログ「ホーセの見てある記」は←こちら

橋爪法一　検索

春よ来い

第八六八回　涙流しながら

こんなこともあるのですね。エッセイ集を出し始めて二五年になりますが、一四冊目の編集では時々涙が流れて、作業が止まってしまったのです。

今回のエッセイ集、『母ありてこそ』は二〇二二年七月に母が最後の入院をした頃から、母が亡くなって一年後に大潟区の弟が亡くなる直前までのエッセイをまとめたものです。全部で六〇篇を収録しました。

原稿チェックを始めて二つ目のエッセイ・「母のほめ言葉」でまず作業は止まりました。エッセイの場面は最後のところです。左手がきかなくなった母がベッドから起き上がろうと、「いち、にいーの」と声を出して難儀しています。そこで私が手を貸したのですが、そのとき母が、「ああ、トチャいてくんていかった」と言ったのです。読んでいて、当時のことを思い出し、涙がひとすじ頬を伝いました。

六つ目のエッセイは「眠り続ける母」。母が最期の入院をしていて、一番切なかった日のことを書いたものです。入院している母と一か月ぶりに面会できることになっていた日。母に会えるとワクワクしていたところへ病院から電話がかかってきました。「エッさんはここ三日間ほど食事がとれてなく、点滴をしています。これからMRI検査を行います。検査結果は、こられたときにお知らせします」という内容です。この電話を切った時、母と話をするどころでなくなっているのではないかと体が震えました。不安は的中しました。母は三日間も眠り続け、呼びかけても反応がない状態になっていたのです。自分で書いた文章なのに、読んでいるうちに感情が高ぶってきて、涙が止まらなくなりました。

八つ目の「母は目を開けた」から「四八日ぶりに帰宅」「母が笑った」「一喜一憂」「達者でな」までは母の病状の変化から母の死に至るまでを書いたものです。

眠り続けていた母が目をあけた瞬間の感動は説明する言葉が見つかりません。そのときの母の顔はいまでも思い出せます。母がかわいがっていたネコが母の寝室に入ってきてニャーン、ニャーンと鳴いたら母が笑顔になったというシーンも忘れることができない場面です。

そして母が亡くなって数日後に書いた「達者でな」。このエッセイでは母の入院時のことから亡くなるまでの間に書けないでいたドラマのいくつかを綴りました。そのなかには最後となった母の言葉を二か所で入れました。

その一つは私の弟たちへの最後の言葉です。三年前の七月二九日午後八時過ぎ、夕食中に母はロレツがまわらなくなるなどの症状が出て、救急車を呼びました。その救急車が来るまでの時間帯に大潟区と愛知県に住む弟たちにテレビ電話をしたのでした。原文には「これまで交通事故などで何度か大ケガをしている大潟区の弟には、『いいか、達者でいろや、ケガしんな』と言いました。愛知県の弟にも『達者でな』と言いました。涙もろい愛知県の弟は、『かちゃ、ありがとね』と言って泣いていました」とあります。

もう一つは私への最後の言葉です。最後の入院をした翌日午前三時前の会話です。

「ばあちゃん、大丈夫かね」
「とちゃか、オレ、死んだがか」
「死んでなんかいねよ」
「脳梗塞か、助けてくれ」

弟たちと同じく、私にも「達者でいろや」というのかと思ったら、私への最後の言葉は「助けてくれ」だったのです。思い出すと今でも切なくなります。

最新エッセイ集、『母ありてこそ』は来月中旬に行われる弟の三回忌法要までには発行します。天国で母と弟で読んでくれることを願いつつ、最後の準備に入りました。

2年ぶりに「よしかわ福祉まつり」

「よしかわ福祉まつり」が20日、2年ぶりに開催されました。会場はほほ笑よしかわの里などの駐車場です。大勢の人が参加していました。

来賓としての挨拶では、みんなと交流して元気をもらうのがこの福祉まつりですと前置きした後、コウノトリの近況を報告。今春、吉川区内で巣立ったヒナたちがいま、北海道にいると言うと会場からは驚きの声が上がりました。

会場では、頸北太鼓瑞芭のみなさんが力強い演奏を披露し、その後、よしかわ保育園の園児のみなさんによる遊戯、吉川高等特別支援学校の生徒、「ふれんどりーライフよしかわ」のメンバーによるダンスが披露されました。太鼓の演奏や踊りではリズムに乗って、踊りだす子どもたちもいました。楽しくて、いい祭りでしたね。

ニュースフラッシュ

上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。１時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は１時間当たり0.016～0.16μSv（マイクロシーベルト）だとのことです。

	9月17日（水）	9月24日（水）
上越消防署	０．０５３	０．０５０
上越南消防署	０．０４３	０．０４３
新井消防署	０．０５７	０．０５０
頸北消防署	災害対応中	０．０５０
頸南消防署	０．０７０	０．０６０
東頸消防署	０．０５７	０．０５７
名立分遣所	０．０５０	０．０６３
高士分遣所	災害対応中	０．０５０